

平成二十九年 度 金沢学院短期大学 入学試験問題（一般入試Ⅰ期）

国 語

（注意事項）

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから15ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

（解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

だいぶ以前に、農学専門のある先生から興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民俗などどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返ってくる。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ齒切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを挙げてほしいと言うと、「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがばあっと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは比較は無理だから、結局諦めました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観の差異以上に、日本人とアメリカ人の美意識の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシヤ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるといって考え方が強い。その秩序とは、左右相称性であったり、部分と全体との比例関係であったり、あるいは基本的な幾何学形態との類縁性など、内容はさまざまであるが、いずれにしても客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一貫している。逆に言えば、そのような原理に基づいて作品を^①セイサクすれば、それは「美」を表現したものとなる。

^②デンケイテキな例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が対八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシヤにおいて成立した美の原理である。ギリシヤ人たちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。「カノン」の中身は場合によっては変わり得る。現に紀元前五世紀においては、優美な八頭身よりも荘重な七頭身が規準とされた。だが七頭身にせよ八頭身にせよ、何かある原理が美を生み出すという思想は変わらない。ギリシヤ彫刻の持つ魅力は、この美学に由来するところが大きい。

もともと、この時期の彫刻作品はほとんど失われてしまっていて残っていない。残されたのは大部分ローマ時代のコピーである。しかししばしば不完

全なそれらの模刻作品を通して、かなりの程度まで原作の姿をうかがうことができるのは、美の原理である「カノン」がそこに実現されているからにほかならない。原理に基づいてセイサクされている以上、彫刻作品そのものがまさしく「美」を表わすものとなるのである。

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているようには思われぬ。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それは「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が妙音だと主張しているのではない。ただ古い池に蛙が飛びこんだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深い静寂の世界に芭蕉は、それまでにない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人のこのような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、いわばモハンテキな「状況の美」の世界である。すなわち春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがぱあつと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言ってよいであろう。日本人の感性は、千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。

「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮の美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とは《万古不易》のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いつそう貴重で、いつそう愛すべきものという感覚である。日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、そのため

であろう。

実際、清少納言が④デキカクに見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと⑤ミツセツに結びついている。そのことは江戸期に広く一般大衆のあいだで好まれた各地の名所絵を見てみればよくわかる。

名所絵とは、文字通りそれぞれの土地において見るべき場所、訪れる価値のある所を描き出したものだが、単なる場所ではない。例えば、広重の晩年の名作《名所江戸百景》を見てみると、雪晴れの日本橋とか、花の飛鳥山など、季節ごとの自然と一つになった情景が描き出されている。事実この連作シリーズは、まとまったかたちとしては、春夏秋冬の四部に分類されている。しかし⑥そのように分類したのは広重ではない。広重は、江戸のなかの見るべき場所を、特に順序立てずに、いわば思いつくままばらばらに描き出して行った。それが好評であったので、次々と続けて、百十八点まで描いたところで彼は世を去った。その後版元が、別の画家に追加分を一点と扉絵のセイサクを依頼し、あわせて計百二十点の「揃物」として刊行したが、そのときに内容を四季に分類したのである。ということは、当初ばらばらに描いた「名所」が、いずれも季節の風物や年中行事と結びついていたので、自ずから分類が成り立ったということである。つまり名所そのものが、江戸の町と自然との結びつきによって生まれて来たのである。

かつての名所絵がそうであったように、今日でも人々は、旅をするとその記念や土産ものとして、土地の観光絵葉書を買って求める。パリやローマに行くと、土産物屋の店先にさまざまな絵葉書が並んでいるが、そのほとんどは、ノートルダム大聖堂とか、凱旋門がいとか、エッフェル塔など、代表的なモニュメントをそのまま捉えたものである。だが日本の観光絵葉書を見ると、満開の桜の下の清水寺とか、雪に覆われた金閣寺など、季節の粧いをこらしたものが圧倒的に多い。もちろん、清水寺も金閣寺も、それ自体見事な建築だが、観光写真はそこに自然の変化を組み合わせることを好むのである。⑦それもまた、「状況の美」を愛する日本人の美意識の表われであろうか。

(高階秀爾『日本人にとっての美しさとは何か』筑摩書房、一部改変。)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

5

① セイサク 1

① セイトウな後継者。

④ マイナンバーセイドの施行。

② シンセイヒンの発売。

⑤ カクセイ遺伝。

③ 首相のシセイ演説。

② テンケイテキ 2

① 美術館のキカクテンに行く。

④ 相手のジャクテンを攻める。

② バスのテンジョウイン。

⑤ 歓迎シキテンに出席する。

③ シチテンバットウの苦しみ。

③ モハンテキ 3

① シケンハンイが広すぎる。

④ 古文書をハンドクする。

② 辞書のハンレイを読む。

⑤ ハンザツな手続き。

③ ドウハンシヤ二名まで無料。

④ テキカク 4

① 親のカタキのような目でにらむ。

④ マトを絞る。

② 理屈にカナツテイル。

⑤ 野の花をツム。

③ シズクが落ちる。

⑤ ミツセツ 5

① チセツな文章を読まされる。

④ 会社をセツリツする。

② ゾクセツを簡単に信じてはいけない。

⑤ 子どもたちのセツジツな願い。

③ ホテルまでチヨクセツ行ってください。

問2 傍線部(ア)「これがどうもうまく行かない」とあるが、なぜうまく行かなかったのか。その理由として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 日本人はアメリカ人のような明確な美の規準を持っていないため、答えを一つだけ選ぶことができないから。
- ② 日本人はアメリカ人と違い、ライオンや馬のような大動物よりも小鳥のような小動物を好む傾向が強いから。
- ③ 「何を美とするか」という感覚に日米の違いがあるため、両者を比較しうるデータが揃えられなかったから。
- ④ 比較文化論を論じるためのデータとして、「一番美しい動物は何か」を問う調査はもともと不適切だったから。
- ⑤ 日本人は歯切れが悪いうえに、アメリカ人のようにはっきりした意見を言わないことを美德としているから。

問3 傍線部(イ)「それまでになく新しい美を見出した」とあるが、芭蕉が見出した「美」はどういうところが新しいのか。最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 「美」とはうつろいやすがゆえに貴重であるということ、余すところなく描いたところ。
- ② 美しい物体そのものではなく、自然の営みと結びついた一瞬の状況を「美」と捉えたところ。
- ③ 季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉え、それまでになく、実体的な言葉で表現したところ。
- ④ 「どのような場合に美が生まれるか」という問題を、俳句という手段で見事に捉えたところ。
- ⑤ 「水の音」のように目には見えない感覚的なものを、「美」と捉えて言葉で表現したところ。

問4 傍線部(ウ)「万古不易」の意味として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 常に成長し、進化し続ける。
- ② 形あるものは必ず壊れる。
- ③ すべてのものは単純である。
- ④ 永遠に変わらない。
- ⑤ 世の中は難解なもので満ちている。

問5 傍線部(エ)「そのように分類したのは広重ではない」とあるが、なぜ《名所江戸百景》は結果として四季ごとに分類をすることができたのか。その理由として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 版元が広重に、名所だけでなく季節の風物も描きこむよう依頼したから。
- ② もともと、広重はあとで四季に分類することを想定して描いていたから。
- ③ 季節や年中行事と結びつけて描いた方が、土産物として客に売れたから。
- ④ 広重の描いた絵が、どれも季節の風物や年中行事と結びついていたから。
- ⑤ 広重は思いつくままにばらばらに、季節の風物や年中行事を描いたから。

問6 傍線部(オ)「それもまた、「状況の美」を愛する日本人の美意識の表われであろうか」とあるが、観光写真のどういふところに日本人の美意識が表われていると考えられるか。最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 建物自体の美しさに季節の最も美しい瞬間を合わせることで、日本の「美」を客観的に写真で表現しようとしたところ。
- ② 建物自体の美しさに満開の桜や雪のような自然の変化を取り込んで、建築物自体の美しさを際立たせようとしたところ。
- ③ 建物自体の美しさに日本の「美」の基本原理である季節感を加え、ゆるぎない日本の「美」を表現しようとしたところ。
- ④ 建物自体の美しさに万古不易の自然の美を彩って、日本の季節のうつろいやすさを写真の中にとらえようとしたところ。
- ⑤ 建物自体の美しさにうつろいやすい季節の粧いをこらして、その時季にしか見られない貴重な瞬間を切り取ったところ。

問7 次の各文はそれぞれ、「実体の美」「状況の美」のどちらと関係が深いか。「実体の美」には①、「状況の美」には②をマークせよ。

解答番号は

11

 ~

20

。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|--|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| <p>① どのような場合に「美」が生まれるかを重視する。</p> <p>② 「美」の原理「カノン」に基づいている作品は、必ず「美」を表現したものとなる。</p> <p>③ そのもの自体が「美」を表している。</p> <p>④ 「美」は季節の移り変わりや時間の流れ、自然の営みと深い関係がある。</p> <p>⑤ どこに置かれてもそのものの美しさは変わらない。</p> <p>⑥ 四季それぞれの最も美しい姿を「美」と捉える。</p> <p>⑦ 「カノン」を実現していれば、不完全なものでも美しいとする。</p> <p>⑧ 優美な八頭身、荘重な七頭身を美しいと考える。</p> <p>⑨ 「美」は時間の経過とともに、はかなく消えてしまう。</p> <p>⑩ 「美」の中に客観的な原理に基づく秩序がある。</p> | <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>20</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>19</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>18</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>17</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>16</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>15</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>14</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>13</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>12</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: top;"><tr><td>11</td></tr></table> | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 |
| 20 | | | | | | | | | | | |
| 19 | | | | | | | | | | | |
| 18 | | | | | | | | | | | |
| 17 | | | | | | | | | | | |
| 16 | | | | | | | | | | | |
| 15 | | | | | | | | | | | |
| 14 | | | | | | | | | | | |
| 13 | | | | | | | | | | | |
| 12 | | | | | | | | | | | |
| 11 | | | | | | | | | | | |

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。

一九四五年一月、フィリピンのミンドロ島で、日本軍兵士の「私」はアメリカ軍の追撃を受けた。病み上がりで体力を消耗していた「私」は、移動する部隊から離れ、死を覚悟しながら飲み水を求めて島内をさまようが、なかなか水場を探し当てられずにいた。

私は再び私の力を使い果していた。私は目的地の水が果してそれだけの労力に値するかどうか疑った。この水の減りようから判断すればその水もやはり干上っていると思わねばならぬのではあるまいか。私は林のへりに倒れてしまった。

前方の草原はさし渡し二十間ばかり、左手つまり谷の側から前面までずっと叢林が縁取られ、右手のみ開いて緩やかに陣地正面に上っていた。そこには比島の丘々にあの柔和な夢幻的な縁を与えている、細長い萱に似た雑草が生えていた。

何の物音もなかった。私がどれほどそうして横たわっていたか明らかではない。私はやはり自殺を考えていたか、渴えていたか、明瞭でない。これに続いて私の（a）逢着した一つの事件が、この間それと関係がないあらゆる記憶を抹殺してしまっている。

確かなのは私が米兵が私の前に現われた場合を考え、（c）それを射つまいと思つたことである。

私が今ここで一人の米兵を射つか射たないかは、僚友の運命にも私自身の運命にも何の改変も加えはしない。ただ私に射たれた米兵の運命を変えるだけである。私は生涯の最後の時を人間の血で汚したくないと思つた。

米兵が現れる。我々は互いに銃を擬して立つ。彼は遂に私がいつまでも射たないのに（b）痺れを切らして射つ。私は倒れる。彼はこの不思議な日本人の傍に駆け寄る。この状況は実に（c）あり得べからざるものであるが、その時私の想像に浮んだまま記しておく。（e）私のこの最後の道徳的決意も人に知られたいという望みを隠していた。

私の決意は意外に早く試練の機会を得た。

谷の向うの高みで一つの声があった。それに答えて別の声が比島人らしいアクセントで「イエス、云々」といった。声は澄んだ林の空気を震わせて響いた。（d）この我々が長らく遠く対峙していた暴力との最初の接触には奇怪な新鮮さがあった。私はむっくり身をもたげた。

声はそれきりしなかった。ただ叢を分けて歩く音だけが、ガサガサと鳴った。私はうながされるように前を見た。そこには果して一人の米兵が現われ

ていた。

私は果して射つ気がしなかった。

それは二十歳位の丈の高い若い米兵で、深い鉄兜てつかぶとの下で頬が赤かった。彼は銃を斜めに前方に支え、全身で立って、大股にゆつくりと、(d)登山者の足取りとりで近づいて来た。

私はその不要＊心に呆あきれてしまった。彼はその前方に一人の日本兵が潜む可能性につき、些いささかの懸念も持たないように見えた。谷の向うの兵士が何か叫んだ。こっちの兵士が短く答えた。「そっちはどうだい」「異常なし」とでも話し合ったのであろう。兵士はなおもゆつくりと近づいて来た。

私は異様な息苦しさを覚えた。私も兵士である。私は敏捷びんしょうではなかったけれど、射撃は学生の時実弾射撃で良い成績を取って以来、妙に自信を持っている。いかに力を消耗しているとはいえ、私はこの私が先に発見し、全身を露出した相手を逸することは無い。私の右手は自然に動いて銃の安全装置＊を外していた。

兵士は最初我々を隔てた距離の半分を越した。その時不意に右手山上の陣地で機銃の音が起った。

彼は振り向いた。銃声はなお続いた。彼は立ち止って暫しばらくその音をはかるようにしていたが、やがてゆるやかに向きをかえてその方へ歩き出した。そしてずんずん歩いて、忽たちまち私の視野から消えてしまった。

私は(エ)溜息ためいきし苦笑して「さて俺はこれでどっかのアメリカの母親に感謝されてもいいわけだ」と呟つぶやいた。

(大岡昇平『捉つかまるまで』、集英社文庫。)

(注) ミンドロ島：フィリピン諸島の一つ。一九四二年から一九四五年まで日本軍が占領していた。

二十間：およそ三六メートル。

不要心：不用心と同じ。

安全装置：銃やピストルに込めた弾丸が暴発するのを防ぐ装置。

問1 点線部(a)～(d)の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

21

 ～

24

。

(a) 逢着した

21

- ① 発見した
- ② 体験した
- ③ 出くわした
- ④ 探しあてた
- ⑤ めぐりあった

(b) 痺れを切らして

22

- ① いらいらして
- ② 落ち着きを失って
- ③ 動けなくなつて
- ④ 感覚を失って
- ⑤ 待ちくたびれて

(c) あり得べからざる

23

- ① あるはずがない
- ② あつてはならない
- ③ そもそもあり得ない
- ④ あり得るかもしれない
- ⑤ あつても仕方がない

(d) 登山者の足取りで

24

- ① 登山を愛する人のように軽快な足運びで
- ② 登山をする人のように無造作な足運びで
- ③ 登山が得意な人のように力強い足運びで
- ④ 登山が好きな人のように弾んだ足運びで
- ⑤ 登山を職業とする人のように慣れた足運びで

問2 傍線部(ア)「それを射つまいと思った」とあるが、なぜ「私」はそのように思ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 敵と味方で立場は違えど、撃たればたおれる一人の人間であることは自分たちと変わりないと思ったから。
- ② もはや自軍の勝利が望めない以上、今後を考えて敵にはひたすら温順な態度を示すべきだと思ったから。
- ③ 自軍の勝利や敗北には関係のない死者を、この期に及んで自分が増やしたくはないと思ったから。
- ④ 死の恐怖を味わった自分が、人を殺し道連れにしようとすることは、あまりにも理屈に合わないと思ったから。
- ⑤ ここに現われる敵は、おそらく自分同様に疲労し体力を消耗しているはずだと考え、同情を禁じ得なかったから。

問3 傍線部(イ)「私のこの最後の道徳的決意も人に知られたくないという望みを隠していた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 撃つか撃たれるかという場面で、撃たないことを選んだ寛容な自分を、大々的に自慢したい気持ちがあったということ。
- ② 撃たなければ撃たれるという場面で、撃たれることを選んだ自分を、誰かに認めてもらいたい気持ちがあったということ。
- ③ 勝敗に関わらない場面で、あえて自制心を働かせた自分の判断が、世の人に感動を与えることを期待していたということ。
- ④ 撃つよりはむしろ撃たれる方がよいという厭戦えんせんの思いを、戦友たちに最後に理解してもらいたいと願っていたということ。
- ⑤ 戦争が、実は兵士一人一人の生死の判断の積み重ねであるという真実を、世間の人に知ってほしいと思っていたということ。

問4 傍線部(ウ)「この我々が長らく遠く対峙していた暴力との最初の接触には奇怪な新鮮さがあった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 27。

- ① 遠方にいたはずの米軍が突然目の前に現れたとき、「私」はなぜか自分にも捉えがたい好戦的な気分にも襲われたということ。
- ② 米兵が接近してくる気配を谷の向うに感じたとき、「私」はそれに対し奮い立つ気持ちを抑えることができなかったということ。
- ③ 自軍を圧迫していた敵が目前に現れたとき、想定していたにもかかわらず「私」はそれに不思議と生々しい感じを抱いたということ。
- ④ 米軍が接近してきたとき、英語で会話するなど意外に敵が無警戒な様子なので、「私」はその態度を不思議だと感じたということ。
- ⑤ 長く敵対していた強い相手が、攻撃心を秘めた兵士の姿をとって突然現れたので、「私」はそれを予想外と感じ驚いたということ。

問5 傍線部(エ)「溜息し苦笑して」とあるが、この時の「私」の心情説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 28。

- ① 放心と落胆
- ② 安心と侮蔑
- ③ 安堵と自嘲
- ④ 感心と皮肉
- ⑤ 感激と心配

第3問 次の問いに答えよ。

(A) 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は ～ 。

(1) 戦争のサンカを実感する。

- ① 参加
- ② 惨禍
- ③ 傘下
- ④ 賛歌
- ⑤ 酸化

(2) 株価がコウトウする。

- ① 高等
- ② 口頭
- ③ 高騰
- ④ 好投
- ⑤ 高踏

(3) 運転免許をコウシンする。

- ① 後進
- ② 後身
- ③ 交信
- ④ 更新
- ⑤ 恒心

(4) 高名な作家の名をカンした文学賞。

- ① 管
- ② 卷
- ③ 観
- ④ 関
- ⑤ 冠

(5) 袖そですり合あうもタショウの縁。

- ① 多少
- ② 他生
- ③ 多生
- ④ 他称
- ⑤ 多样

(B) 次の文章の空欄 A、E の中には、後の①、⑤のいずれかの文が入る。それぞれ適当なものを一つずつ選べ。

解答番号は A ㉞ 34、B ㉞ 35、C ㉞ 36、D ㉞ 37、E ㉞ 38。

現在、情報消費に関する一つの流れと言えば、圧倒的な情報量の爆発である。インターネットが世の中にばらまかれたことによって、情報を発信するコストが大幅に低下し、誰でも簡単に情報を発信することができるようになった。

個人の情報発信が爆発しただけではなく、旧来のメディアもスペースの制限がなくなったため、以前は編集段階でカットしていたような情報もネットで配信するようになった。 A

そして消費者は常にスマートフォンという情報の入り口に接続され、絶え間なく情報がプッシュされるようになったのだ。

常にネットワークと接続していることは、単にコンテンツとつながっているだけではなく、仕事やプライベートでの人間関係とも絶えずつながっている状態になる。

即ち、現代人は過剰な情報と人間関係にさらされ、たとえ人間自身の情報処理能力が上がっているとしても(実際、歴史的に見れば、人間の話す速度、聞いて理解できる速度、読書速度は上っている)、それを上回るスピードで刺激が増えているのだ。

つまり、 B

その結果、今、流行しているサービスは情報をたくさん集めるサービスではなく、情報をせき止めるサービスである。

たとえば、現在多くの資金を集め爆発的にユーザーを増やしているネットサービスのカテゴリーは、「ニュースアプリ」と呼ばれるものだ。様々なニュースサイトから、その人が読みたいであろうニュースを選別し、それだけを読めるようにしたサービスなので、個々のニュースサイトに行つて所狭しと並べられた膨大なニュースをいちいちチェックする必要がない。

コンピューターやインターネットが膨大な情報を生み出している一方で、コンピューターアルゴリズムとネットワーク解析によって情報を制限させ、そのサービスが結果的に短期間で数百万人の利用者を集めるのに成功しているのはなんとも皮肉である。

人間関係も同様だ。交友関係を広げることを提供価値としていたフェイスブックに代表される SNS は、日常的なコミュニケーションツールとしての地位を失いつつある。むしろ、若者達が普段使うサービスは、少数の親しい友人達とのクローズなやりとりを楽しむ LINE に移った。また、

Twitterの隠れた人気機能は「ミュート」機能である。フォローを外すのは角が立つがツイートは表示させたくない、つまり「視界から消して、黙らせる機能」、それがミュート機能である。

C

自分の読みたい新聞を読み、聞きたい人の意見を聞き、見たいテレビを見る。

その結果起きたことが「蝸壺型」^{※たこぼ}の社会認識の広がりである。

D

この顕著な例がネット右翼だ（特定思想に限らず、反原発、環境系、左翼系の運動にも同様の傾向がある）。同調するものが集まって互いを肯定しあい、同時に反対意見を非難し排除することで、こうした極端な考え方や一方的な見方はますます過激になっていく。

E

（瀧本哲史『戦略がすべて』、新潮新書。）

（注）蝸壺型：蝸壺は、蝸を捕まえるための壺。それぞれの専門ごとに、その壺のような閉鎖的な環境に入り込んでしまっ、お互いにコミュニケーションをとりたくないという組織の様態を指す。

- ① インターネットによる情報爆発は、世界をつなげるという理想と裏腹に、自分の狭い認識をお互いに再確認しあうという真逆の社会を生むことにもなっている。
- ② その結果、テキスト情報も、音楽配信も、動画配信も爆発的に量が増えていった。
- ③ かくして、人々は再び自分の心地よい情報、人間関係を再確認する情報環境に回帰しつつある。
- ④ あらゆる人が情報処理速度を上回る刺激に悩まされる、そういう状況なのである。
- ⑤ 心地よい情報、意見の合う人間としか付き合わないために、「私の周りにはみんな私と同じ意見だ」「私の意見は間違っていない」と思ってしまうのだ。

